

家畜損害防止関連情報

◆ 最終回 酪農にかける思い

搾乳牛1頭(7500～8500^{kg}/305日)の四つの乳房にかかわっているのは、NOSA I、JA、乳業会社、飼料会社、薬品会社、農薬会社、農機具会社、種子関連会社、肥料会社など、両手ではとても数えきれません。

国は畜産・農業を保護・振興するため、営利を行わない組織に手を貸しております。それでも、乳牛や酪製品は世界の価格と比較できないほど高い状態です(例えば、チリでは牛ロース1^{kg}が日本円の300円前後です)。なぜでしょう?(牛や飼料の流通に無駄はありませんか?)

酪農家に月一回送られてくる乳検の成績(無駄にしていますか?)と、表1の数値を比較して下さい。

表1 牛群の繁殖目標値(中尾, 1999)

(初回授精月齢を早めると、流産率や難産率が高まります。分娩間隔を短くすると、分娩後の子宮・卵巣の機能回復が遅れたり、乳房炎の発症率が高まります。耐用年数を早めると、遺伝的改良は早まり、乳房炎発症率も低下しますが、育成期の経費比率が高まります)

指 標	目 標	異 常
初回授精時月齢(平均)	14～16	18以上
初産月齢(平均)	23～26	27以上
分娩後初回発情日数	45以内	60以上
分娩後初回授精日数(平均)	60～70	80以上
初回授精受胎率(%)	50～60	50以下
3回目授精までの総受胎率	90	80以下
1受胎当たり授精回数	1.7～2.2	
分娩後受胎までの日数	85～115	115以上
分娩間隔(日)	365～395	395以上
繁殖障害による淘汰率(%)	8以下	
耐用年数(産次数)	3以上	
流産率(%)	5以下	8以上
難産率(%)	10以下	
胎盤停滞率(%)	8以下	10以上
子宮内膜炎率(%)	10以下	15以上
卵巣囊腫率(%)	10以下	15以上

繁殖成績を上げるため、牛と手を組みましょう。

朝晩の行動、目の輝きと動き、ふんの性状や生殖器周辺に付着している粘液などを注意深く観察します。

さらに、育成牛の乳房の形の変化(未経産乳房炎の早期発見)、搾乳開始時の前搾り乳の性状、乳房の触感に注意し、わずかな異常でも獣医師と相談する事です。

今ではいろいろな情報は、酪農専門誌や専門書、あるいはインターネットから容易に手に入ります。新しい情報で、理解に苦しむ時は改良普及員や指導員に尋ねましょう。北海道の酪農は、「ウシづくり・クサづくり・ツチづくり、そして人づくり」の言葉から生まれました(高等学校や大学、組合や加工工場の創設が行なわれました)。

私の好きな一コマ・マンガ(図1)ですが、人の食料と競合するような穀物の利用を少なくする事が、価格競走に負けない酪農なのかもしれません！

図1 「草なんだゾ、このバカ野郎！ 食うはずなんだが・・・忘れたのか？」
(橋本記、1980:禁句がありますが、お許し下さい)(アニマル・マシーン、1964)

酪農分野の海外研修生(国際協力事業団)を十勝の酪農家に案内し、平均搾乳量が 8,500kg/305日・頭の説明の時、「給与している餌を知りたい」と言われた農家が乾草・サイレージ・配合飼料・飼料添加剤の給与量や、回数の説明を行ないました。配合飼料を手にとった研修生は、「国に持ち帰りたい。これは近所でも食べられない人がいる程貴重な食料です」と説明しました。読者の皆さん、この一コマ・マンガは 40 年程前にイギリスの酪農が抱える問題を示した図です。

